点訳フォーラムＱ＆Ａ

2020年４月～2021年３月版

第１章　点字・点訳の基礎知識

その６　点訳・校正の位置づけ

１．p14　３．調査

①「着替える」について

名詞の場合は「きがえ」ですが、動詞なら「きかえる」と学んできました。しかし、NHKの「ことばのハンドブック」では初版で「きかえる」、２版では「きがえる」と変わってきているようです。「きがえる」と点訳してよいのでしょうか。

②「20歳」について

漢字で「二十歳」でなくて数字で「20歳」でも「はたち」と読んでよいのでしょうか。

【Ａ】

①「着替える」の本来の読みは「キカエル」ですので、点訳者の姿勢としては、「てびき」p14「３．調査」に書かれているように、「キカエル」と点訳した方がよいと思います。

「着替え」《きがえ》は連濁となり、「着替える」《きかえる》は連濁とはならないことは、「動詞＋動詞」の複合動詞は連濁しないという原則にもあっています。分かりやすい例として、「手放す」《てばなす》、「切り放す」《きりはなす》などがあります。

現状でも、ほぼすべての「国語辞典」が「きかえる」になっていますので、文字である点字としては、「きかえる」でよいと思います。

なお、話し言葉では「きがえる」の方が多くなっているので、「ＮＨＫことばのハンドブック第２版」では、１番目と２番目を逆転させて、「きがえる」が、１番目の読みになっているようです。

②「二十歳」「20歳」を「はたち」と読むのは「ニジッサイ」の和語読み（慣用読み）ですので、「20歳」と書いてあっても、文脈によって、「はたち」と読むか「ニジッサイ（数２０サイ）」と読むかを判断してよいと思います。

２．p14　３．調査

酒店・酒類は正式にはシュテン・シュルイと読むと思いますが、サケテン・サケルイと読んでもよいでしょうか。辞書の見出し語にはありませんが、「種類」と混同してしまいそうですし、サケテン・サケルイの方がわかりやすい気がします。

点訳では辞書にない読み方をしてはいけないのでしょうか。

【A】

「酒店」（さけてん）は国語辞典の見出し語としてありますので、「さけてん」と読んで構いません。そのほか「さかだな」「さかみせ」「しゅてん」の読み方もあります。

「酒類」は、酒税法などとの関係で、正式には、「しゅるい」と読みますが、辞書の中には、語義説明の中に「さけるい」と読みが記してあるものもあります。「おじは、酒類を扱うお店を営んでいた」のような場合は、「さけるい」と読んでもよいと思います。ただし、「醸造酒類、蒸留酒類、混成酒類、酒類卸業 酒類販売免許」などは「しゅるい」と読みます。

辞書にない読み方をしてはいけないということはありませんし、辞書にすべての語の読み方が書いてあるわけでもありません。ただ、見出し語として載っている読み方に限定される場合もありますし、点訳者はわかりやすさに配慮して書いたつもりでも、文の流れや文の雰囲気を損なう場合もありますので、十分注意して、何人かで相談して決定することが大切だと思います。

３．p14　３．調査

広辞苑・大辞林などでは、「兄姉」「弟妹」「姉弟」の読み方は「けいし」「ていまい」「してい」とあります。

点訳では、訓読みをしたほうが、分かりやすい語句があると聞いたことがありますが、辞書の読みとは関係なく、訓読みで点訳するのはどんな場合でしょうか。また、以下の場合はどのようにしたらよいでしょうか。

１．妻が穏やかに笑い、小学生の姉弟がじゃれあう。

２．兄姉が仕切っている。

３．兄姉は、弟妹をこんなにみてあげている。

【A】

兄弟姉妹の言い方や読み方は、原本の内容、種類、また文脈や会話か地の文かなどによってさまざまで、一つの読み方に定められないと思います。

兄弟（きょうだい、けいてい）、姉妹（しまい）、弟妹（ていまい）は、ほとんどの国語辞典に掲載されてもいますし、一般的に使われていますので、点訳でもその読みを用いても、分かりにくいと言うことはないと思います。

兄姉（けいし）、兄妹（けいまい）、姉弟（してい）は、あまり使われない読み方ですし、この読みが掲載されていない国語辞典もあります。

このような場合、原文の種類や文脈などによって、次のような点訳の方法が考えられると思います。

(1) 日本語では、兄・弟・姉・妹をすべて「きょうだい」と言う場合が多いので、「キョーダイ」と書いて、後ろに第１カッコで（アニ■イモート）などと書く。会

話文や一般的な読み物などでは、この方が、流れが自然な場合があります。前後の文脈から（アニ■イモート）などと断る必要が無い場合もあります。
ご質問の１．の文は、この方法がよいのではないでしょうか。
(2) 学術的な本や「きょうだい」と読むと不自然な場合は、「ケイシ（アニ■アネ）」など、音読みの後に訓読みを第１カッコで入れてもよいと思います。ご質問の２．３．は、この方法が良いと思います。「弟妹」は「テイマイ」だけで分かると思います。
(3)訓読みだけを書く方法もあるかもしれません。しかし、文の流れが不自然になる場合もありますし、一語としてのまとまった意味が薄れてしまう感じもしますので、この方法が適している場合は少ないように思います。
なお、(1)(2)で、「キョーダイ（アニ■イモート）」「ケイシ（アニ■アネ）」などと書く場合、漢字の読み替えであって、点訳に際して改めて付けた説明などではありませんので、点訳挿入符ではなく、読みやすい第１カッコをお勧めします。

４．p14　３．調査
「母子」、「父子」の点訳についての質問です。
母子家庭、父子家庭などの熟語では「ボシ」「フシ」ですが、下記のような文章では「ボシ」「フシ」は感覚的には不自然なように思えます。
①すぐ後ろに並んでいた母子は帰っていった。
②19歳のメスのキリンと８歳のオスのキリンがいる。母子だ。
③「ねえ、お父さん。どうして･･･なの？」と息子は聞いた。父はこう答えた。･････あの父子はその後、どうしたのだろう。

①前文で母親と子供のことは書かれていないので、「ハハコ」の方が理解しやすいのではないか。
②前文で母親と子供のことが書かれているので、「オヤコ」がよいのではないか。
③前文で父親と子供のことが書かれているので、「オヤコ」がよいのではないか。
黙読しているときには、「ボシ」「フシ」とは読んでいないと思うのですが･･･「ボシ」「フシ」でよいという人が多いのですが、どうなのでしょうか。
【A】
「親子」のことを「父子・母子・父娘・母娘」などと書かれているのは、「おやこ」の組み合わせを具体的に示そうとする書き手の選択によると思います。ですから、これらは、いずれも「おやこ」と読むのが自然だと思います。
もちろん、「母子手帳、母子家庭、父子家庭」などは「ボシ・フシ」と読みますし、「母子」は「母子草」など、「ハハコ」とも読みます。
ご質問の、①②③はいずれも「オヤコ」と読んでいいと思いますし、①は「ハハ

コ」と読んでもよいと思います。「父子・母子・父娘・母娘」などを「オヤコ」と書いただけでは、その関係が分からず、説明を必要とする場合は「オヤコ（チチ■ムスメ）」などと、第１カッコで補います。これは、「きょうだい」を「兄妹、姉弟」などと書かれている場合も同じになります。

５．p14　３．調査

「私」の読み、「わたし」と「わたくし」の使い分けはどのように判断したらよいでしょうか。

【A】

「私」は、以前は、常用漢字の読みとしては「わたくし」だけでしたが、平成22年の常用漢字表の改定により「わたし」も常用漢字の読みとなりましたので、どちらで読んでも間違いではありません。

点訳でも、以前は「私」の読みは、「ワタクシ」と厳密に規定していたこともありましたが、常用漢字表の改定や実際の使われ方などから、現在ではどちらの書き方も同じくらいにあると思います。

一般に、「わたし」の方が「わたくし」よりはくだけた、打ち解けた用い方になると思います。現在の会話文では、ほとんどが「わたし」になっていると思いますし、１タイトル内で使い方を決めて、不自然でない読み方がしてあれば、あまり神経質にならなくてもよいと思います。

ただ、「私小説」「私立」「私商い」など慣用的な言い回しや複合語になっている場合は、使い分けが必要ですし、本や種々の作品のタイトルなどは、調査して書くことが必要になります。

６．p14　３．調査

「他愛ない」は、「たわいない」と読むのが一般的と言われておりますが、「他愛のない雑談」の場合は、どう読めばいいですか。

【A】

「タワイノ■ナイ■ザツダン」となります。

「他愛」と書くのは当て字で、「～が（も）ない」の形で、「正体がない」「思慮分別がない」「とりとめがない」「てごたえがない」などの意味の時には、「他愛」と書いてあっても、すべて「たわい」と読みます。

「他愛」を「たあい」と読むのは、「他愛主義」のように用いて、「自分の利益よりまず他人の幸福を願う」という意味のときだけになります。

７．p14　３．調査

「他」の読み方で、いつも悩みます。点訳する上で、「た」と読むか、「ほか」と

読むか、何か決定的な決まりはありますか。

【A】

決定的な決まりといえるものはないと思います。文脈や後ろに続く「てにをは」や前後の言葉遣いで自然かどうかを判断することになります。

ただ、「タ」では点字では意味が取りにくいのではないかと心配される方もいますが、以下のような理由から、「タ」と読む方が自然な場合が多いと思われます。

１．現在では「他」は音読みが「タ」、訓読みが「ほか」となっていますが、常用漢字表が改定されるまでは、「他」の読みは「タ」だけで、「ほか」は仮名で書くか、「外」の漢字を当てていました。戦後、長くこの状態が続いていたので、現在でもこのような文字遣いになっている読み物が多いと思います。

２．「そのた」には、「その他」の漢字だけが当てられます。「そのほか」は仮名か、「その外」となります。

特徴的な使われ方としては

「ほか」　ほかでもない、～ほかない（驚くほかない）、ほかに～ない

～のほか（思いのほか、思案のほか、このほか）　～ほか何名

「た」　たを～（他を圧する、他を顧みない、他を犠牲にする･･･）

たに～（他に先駆ける、他に抜きんでる）

たと～（他と区別する、他と異なる）

たの～（他の追随を許さない、他の業者の手に渡る）

などがあります。

このように、「他」は、まず「た」と読み、文脈上「ほか」と読んだ方がふさわしい場合に「ほか」と読むようにするのがよいと思います。

８．p14　３．調査

「描く」は「えがく」「かく」をどのように読み分ければよいですか。

【A】

「描く」も「私」「他」と同様、常用漢字の改定のときに、「えがく」に「かく」の読みも加わった漢字です。

本来は「えがく」で、

①絵や図をかく

②様子を写し出す。表現する。描写する。「若い教師の生活を描いた作品」

③心に思い描く、創造する。「理想を描く」「勝利を胸に描く」「夢に描く」

④ものが動いた跡をある形に表す。「孤を描く」「トンビが輪を描いて飛ぶ」

などのような意味があります。(「大辞林」などから)

この中で、「かく」とも読めるのは、①と④の意味で文の流れから「えがく」と読むと不自然な場合や、「絵描き」（えかき）のような例になると思います。

「孫が幼稚園で絵を描いてきた」「出勤前にさっと眉を描く」のような場合は、「かいてきた、かく」のほうが自然に読めると思います。

しかし、「描写する、創造する」のような内容の場合は、「えがく」の方が自然に読めます。

「かく」には本来「書く」という漢字を当てていますので、「描く」は基本的には「えがく」と読みます。上記のように、絵や図、線などを（芸術的にではなく）書いているような場合で、「えがく」と読むと流れが不自然な場合にのみ「かく」と読むのがよいと思います。

９．p14　３．調査

「ちくまプリマー新書」を点訳中です。読者対象は中高生くらいだと思うのですが、「陽子の数」「原子の数」の「数」の読み方で迷っています。「スー」がいいのか、「カズ」がいいのか、どちらがいいでしょうか。

【A】

数学・理科の分野では、「すう」と読んだ方がよいと思います。

一般書や日常生活の場面では「かず」で構わないと思いますし、厳密な使い分けは困難ですので、読み分けに神経質にならなくてよいと思いますが、自然数を超える数字を扱う場面や数学・理科に関する本の場合は、「スー」と点訳することをお勧めします。

『点訳のてびき』の点字版でも「スーノ■カキカタ」「数４ケタマデノ■スー」「オオキイ■スー」「オヨソノ■スー」と書いています。

「ちくまプリマー新書」は、中高生向けの数学・理科、社会・政治などの分野の入門書的役割を果たしていますので、学校で学ぶように「スー」と書くことをお勧めします。

10．p14　３．調査

「あり得る」の読み方なのですが、「ありうる」と「ありえる」のどちらが点訳として正しいでしょうか。

【A】

「ありうる」と読みます。

「ありえる」という人も多くなりましたが、点訳では、本来の読みの「ありうる」を用います。

「得る」は、現代語では、「える」と読み、「え　え　える　える　えれ　えよ（えろ）」と活用しますが、「ありうる」「かんがえうる」などのように動詞の連用形に続いて「～ことができる」の場合は、「うる」と読み、文語の形で活用します。

「え　え　うる　うる　うれ　えよ」となります。

「ありうる、ありえない、考えうる限り、言いえて妙だ」のように用います。

11. p14　３．調査

「開く」で「あく」と「ひらく」の使い分け、読み分けはどうなりますか。

【A】

国語辞典で「開く（ひらく)」を引くと、辞典によっては15以上も語義が載っています。自動詞も他動詞もあり、どんな場合に読み分けるのか迷います。

そこで、「開く」（あく）の方を引いてみると、「明く」「空く」の漢字もあり、書き分けなども加味すると、どの辞書もおよそ次のような例が挙げられています。

自動詞

１．ぴったりとさえぎっていたものが、ずらされたり除かれたりする

「戸が開く、幕が開く、瓶の口が開く、蓋が固くて開かない」

２．合わさっていたものの間に隙間ができて中が見えるようになる

「口が開く、目が開く」

３．肌が広く出る　「背の開いた服」

４．穴ができる　「胃に穴が開く」

５．錠がはずれる　「かぎが開く」

６．営業が始まる　「店が開く、初日が開く」

７．開票になる　「票が開く」

他動詞

１．自然にあける　「口を開く、目を開く」

慣用句　「開いた口がふさがらない」

「あく」は、自動詞なので、目的語がある場合は「あける」になります。ドアを開ける、カーテンを開ける、ジュースの栓を開ける、口を開ける、目を開ける　本を開ける、かべに穴を開ける、カギを開ける、店を開ける、票を開ける

ですから、目的語がある場合は、他動詞の「ひらく」と読みます。ドアを開く、窓を開く、店を開く、心を開く、口を開く…いずれも「ひらく」になります。

辞書の説明によると、他動詞（目的語がある）で「開く」を「あく」と読むのは、意識的でなく、ぽかんとした状態の時だけという説明です。

これは、辞書による、およその使い分けで、特に１．や７．の意味の時には、「ひらく」とも読みます。ただ、「花のつぼみが開く、足が開く、実力の差が開く」などは「ひらく」としか読みません。

以上のことは、すべて、小型の国語辞典に書いてありますので、「開く」という簡単な語でも、国語辞典を引くと興味深く、いろいろな情報が得られます。

12. p14　３．調査

例文に書かれている名前の点訳について伺います。原本に財産目録や遺言書について、書き方の書式と例文が記載されています。その例文の氏名は、「山田一郎」や「吉田次郎」など一般的なものが書かれているのが多い状況です。しかし、「田中幸子」や「佐藤正太郎」の記載があります。名前の読み方のネット検索を行い、「さちこ」か「ゆきこ」か、「せいたろう」か「まさたろう」にするか、と悩んでいます。このような場合、どうしたらよいでしょうか、点訳書凡例は必要でしょうか。

【A】

あくまでも例文でしたら、一般的と思われる読み方でよいと思いますし、例文と理解して読むものでしたら、点訳書凡例は必要ないと思います。

任意の名前であることが分からない恐れがある場合は、点訳書凡例で「例文の中の名前の漢字は、一般的と思われる読みとした」のように断ってもよいと思います。

「田中幸子」は「たなか　さちこ」、「佐藤正太郎」は「さとう　しょうたろう」が最も多い読み方のようです。

13. p14　３．調査

「全視情協点字情報便　第１7号」(2020. 3. 28発行）にて、点訳ナビゲーターの変更点についてお知らせがありましたが、「菊花賞（キッカショー)、三方良し（数３ポーヨシ)、国公立」は、点訳フォーラムでも変更しますか。

特に、点訳ナビゲーターで削除となった「国公立」の点字表記について、掲示板747（2017.3.18）で納得しているので今まで通り「コクコーリツ」で統一するか、１タイトル中で統一していれば「コッコーリツ」も指摘しないことにするか、など自施設の方針を決めかねております。

【A】

「菊花賞、三方良し、国公立」は、点訳フォーラムでは変更しません。いずれも「てびき」第１章　その６「３．調査」(p14～p15)、第２章　その１　１　４．(2)（p20）に従った読みですので、「キクカショー」「数３ボーヨシ」「コクコーリツ」の変更はありません。

「き・く・つ」については、点字では促音化しない方が意味を理解しやすいとして、これまで長く踏襲されてきたルールです。

また、「三方」もいずれの国語辞典でも「さんぼう」に語義がありますし、「三方良し」もその慣用句として掲載されています。すでに広く使われている語ですので「方言」の読みを採るのは、根拠として弱いと思います。

ルール・原則に従っている読みを、「これは特別」という形で崩していくと、次第に全体としての判断が曖昧になってきます。これまで通りの方針で行かれることをお勧めします。

14. p14　３．調査

点訳中の本に「エルムノンヴィル」と「アルム＝ノンヴィル」という地名が出てきます。両方とも同じ場所の地名で、土地に住む人はエルムノンヴィルを「アルム＝ノンヴィル」と呼ぶ…ということなのですが、エルム■ノンヴィル、アルム■ノンヴィル･･･と区切って書いてよいでしょうか。調べてみましたが分かりませんでしたので、調べ方についても教えてください。

【A】

「エルムノンヴィル」をネットで見ますと、フランス語で綴りは「Ermenonville」のようです。仏和辞典で確認したところ、「ville」は、「村、村より小さい区域」、「on」は接尾辞らしいことがわかりました。

またWikipediaの原語版で、村の歴史、名前の由来の所を読みましたところ、村の由来はエルミンまたはイエルミノンという農場の所有者の名前であることが書いてありました。「エルミン（ゲルマン系の男の子の名前）の村（コミューン）」だそうで、区切りは「Ermenon　ville」ということになります。

歴史あるコミューンで、900年代に作られたエルムノンヴィル城やエルムノンヴィル子爵がいたという記述もありますので、一続きに書いた方がよい地名だと思います。

その「エルム」の部分を地元の人は「アルム」と発音するとのことで「＝」が使われているのだと思いますが、「＝」があっても、第１つなぎ符は用いず、一続きでよいのではないかと思います。